



2019 年 (平成 31 年)
3 月号 (No. 886)

公益社団法人
日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価 1 部 150 円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>
e-mail ● jac-room@jac.or.jp

目 次

4 年間にわたって房総半島の郡界尾根を踏査	1
第 8 回登山教室指導者養成講習会を今年も長野県小諸市で開催	4
理事の定年制はなぜ必要か	6
準会員から 1 年間で正会員へ	7
平山元会長にカンボジア王国が勲章を授与	8
「2018 植村直己冒険賞」は、スリランカ遺跡調査探検をした岡村隆さんに	9
さんけん通信	10
追悼 吉村健児さんを悼む	11
東西南北	12
Climbing&Medicine	83
活動報告 / 山行委員会	15
支部だより / 千葉支部	16
支第 36 回 図書交換会報告	16
会務報告	17
新入会員	17
図書受入報告	17
ルーム日誌	18
会員異動	19
INFORMATION	19
編集後記	19

▶ 日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木 10~20 時
水・金 13~20 時
第 2、第 4 土曜日 閉室
第 1、第 3、第 5 土曜日 10~18 時

4 年間にわたって房総半島の郡界尾根を踏査

千葉県・房総半島南部を南北に二分する、かつての安房国と上総国の境を郡界尾根と呼ぶ。東西約 60 km に及ぶこの尾根を東京湾岸からスタート、4 年間にわたって踏査し、昨年 12 月、無事、太平洋側にゴールした。房総丘陵はほとんど登山道がなく、地図とコンパス、GPS をフルに駆使しての踏査行であった。

房総半島の郡界尾根とは

房総半島の郡界尾根とは大まかに言うと、半島南部の安房国(旧安房郡・長狭郡／現鋸南町、鴨川市など)と北・東側の上総国(旧天羽郡・周准郡・夷隅郡／現富津市・君津市・勝浦市など)を分けていた尾根である。半島南部を南北に分け、東西に約 60 km にわたり延びている。

具体的には、鋸山の裾で東京湾

千葉支部 山口文嗣

に突き出している西の明鐘岬からスタート、東に向かい一等三角点峰の鋸山に登り、スイセンで人気の嵯峨山、津森山に至る。津森山からは房総半島の分水嶺と同一ルート上を東進し、木之根峠、安房高山、元清澄山へと進む。元清澄山からは分水嶺と別れ北に迂回し、東京大学千葉演習林の中を通り、アジサイで有名な麻綿原高原付近で再び分水嶺を横切り南下、



内浦山県民の森を通り、鴨川市と勝浦市境で太平洋に達している。千葉支部ではこの房総半島の郡界尾根踏査を 4 年間にわたり実施し、昨年 12 月、無事に終了した。

支部発足間もなく分水嶺踏査

郡界尾根踏査事業開始の経緯は、千葉支部発足当時に遡る。千葉支部は 2007 年 6 月に発足し、一昨年やつと 10 周年を迎えたばかりの支部である。ちょうどそのころ、創立 100 周年を迎えた日本山岳会が、記念事業の一つとして中央分水嶺踏査を実施し、2007 年 1 月にその報告書が刊行された。残念ながら千葉県には中央分水嶺が通過しておらず、支部発足時には中央分水嶺事業は終了していた。千葉県在住の一部会員が個人的に中央分水嶺踏査に参加していただけの状況であった。

そこで発足間もない支部会員相互の連携を深めるため、地元千葉の山をより良く理解するため、支部の主要事業として、初代篠崎支



2015年1月24日、嵯峨山下のスイセン畑にて

の最高峰は嶺岡愛宕山（408・2m）で、分水嶺からは外れている）の山に分水嶺があるのかと疑問に思われるだろうが、降った雨は太平洋か東京湾のどちらかに流れるのだから、分水嶺は存在する。ただし、県北部は下総台地と呼ばれる標高100m以下のなだらかな地形で、分水界は存在するが、その特定はなかなか難しい。

房総半島の分水嶺は長生郡長柄町の権現森一等三角点から南下し、四方懸造りで著名な笠

年3月に、館山市坂田の房大山一等三角点、西の東京湾入り口に突き出た洲崎に至って、房総半島の分水嶺踏査を終えた。この間、山行回数は30回に及び、会員・会友55名が延べ262回参加した。また、第1回の権現森と第9回の元清澄山には、一般公募の登山愛好者103名も参加していただいた。この間の記録をまとめた「房総半島分水嶺踏査報告書」を2014年6月に刊行することができた。

郡界尾根踏査の実際

房総半島の分水嶺踏査後の千葉支部の次の事業として、2014年11月から房総半島の郡界尾根踏査を始めた。

分水嶺踏査のときもそうであつたが、房総の夏季は暑さとヤブの

密生、ハチの襲撃とヒルの来襲のため、主に11月から翌年3月にかけての実施となった。ルート中登山道が整備されているのは鋸山、

嵯峨山、元清澄山などハイカーに親しまれている山の周辺のみであった。そのほかはほとんど2万5000分の1地形図とコンパスおよびGPSを駆使して、ときにはヤブをこいでの踏査となった。



2015年1月24日、白狐峠から望む鋸山

2014年11月、生憎の冷たい雨と強風のなか、東京湾を望む明鐘岬をスタート。車力道から鋸山一等三角点に登り、林道口から下山した。その後、石材を切り出した跡の絶壁が続く小鋸山から嵯峨山を経て桜やスイセンが花盛りの保田見集落を抜け、横根峠で長狭街道を横断し津森山に至った。

津森山からは房総半島の分水嶺沿いを木之根峠から安房高山、元清澄山と、分水嶺のときは逆向きに歩を進めた。元清澄山から郡界尾根は分水嶺を離れ、東京大学千葉演習林の中を通っている。千葉演習林は研究教育施設で原則立ち入り禁止のため、あらかじめ許

部長の下で房総半島の分水嶺踏査を実施することになった。房総半島の分水嶺とは、房総半島に降った雨を太平洋と東京湾に分ける、北から南西に向かうおよそ100kmの尾根のことである。

昨年、秩父宮記念山岳賞を受賞された千葉支部員の小嶋尚会員（明治大学名誉教授）によると、房総には「山」はないという。「房総丘陵」という「丘」であるという。確かに標高300m前後（房総半島

森観音を経て養老溪谷の右岸尾根を通り、麻綿原高原へ進む。麻綿原からは西向きを変え、日蓮宗の大本山清澄寺のある清澄山から元清澄山、安房高山、津森山と進む。元清澄山から津森山の間は郡界尾根と重なっている。津森山から再び南下して、ハイカーに人気の御殿山、大日山を経て洲崎に至る。

2009年10月に権現森をスタートし、約3年半掛けて2013

可を受けて、2回に分けて無事踏査を終了。

麻綿原高原で分水嶺と交差した後、北上する分水嶺と別れ、内浦山県民の森を通り南下する。2018年12月8日、会員・会友23名が参加し、日蓮上人が小松原法難で受けた疵を洗ったという「疵洗いの井戸」がある日蓮寺の裏山から、孝行娘おせんが身投げをしたという悲話の伝わる「おせんころがし」付近の、鴨川市と勝浦市の市境の太平洋岸に到達した。この間21回の山行を重ね、会員・会友40名が延べ206回参加した。

房総の山の現状

分水嶺、郡界尾根の踏査で10年近くにわたり房総の山を歩いてきて、その現状を考察してみた。

房総の山は標高は低い、笠森観音付近や内浦山県民の森から元清澄山へかけての分水嶺には、貴重な自然が多く残っている。特に元清澄山のモミ、ツガの天然林や、二次林ではあるが館山市近辺のマテバシイの純林は特筆に値する。また、入山制限はあるが、東大演習林も自然が多く残っている貴重な存在である。



2018年2月24日、日蓮寺裏山のマテバシイの林を登る

一方、郡界尾根(分水嶺)ルート上の峠状の要所には、尾根を横切る切通しが通じている。そこには必ず古い道祖神や馬頭観音が祀られていた。大部分の石像が摩耗して彫られた文字は判読が困難であったが、昔はこれらの峠を行き来して、安房と上総の間で人や物資の交流があったことがうかがえる。現在、鴨川と君津を結ぶ国道410号はトンネルで、県道24号は鴨川有料道路の切通しで結ばれている。また、郡界尾根には少ないが、分水嶺上の集落に近いピークには、三角形や菱形の富士講の石碑が多く設置されている。房総で浅間信仰が盛んだったこと

が感じられる。

稜線直下の少し平坦な場所には畑の跡が残っているが、ほとんどが耕作放棄されてしまっている。また、尾根上には至る所にシカの糞やイノシシが掘り返した跡が見られ、捕獲するための鉄製の四角い檻が随所に設置されている。さらにイノシシやシカの増加でヒルも多く、踏査中の11月にヒルの被害を受けたこともあった。最近では、2月にヒルを発見したとの報告もある。

房総の山は首都圏から近く、冬季でも温暖な気候のため、多くのハイカーに親しまれている。ただし、人が多く行くのは鋸山、富山、



2018年12月8日、郡界尾根末端の太平洋岸にゴール

伊予ヶ岳、御殿山などほんの一部の山にすぎない。このため主要な山以外では、登山道の補修や指導標の整備がほとんど行なわれていない。

また、標高が低く里に近いため私有地が多く、一部の登山道は地主の意向で立ち入り禁止の所もある。主要山岳でもメインルートから一歩外れるとルート不明の道が多く、ときおり道迷いによる遭難騒ぎなども発生している。さらに内浦山県民の森や清和県民の森などでもコース整備が行き届かず、一部閉鎖されているコースもある。今後、これらのルートの再整備や安全な登山道の確保にどう取り組んでいけるのか、千葉支部としての課題にもなる。

終りに、房総の山は標高は低い、稜線近くは急傾斜で崩れやすい地質の所が多いため、主要ルート以外に行くときは、補助ロープが長めのシュリングがあると役に立つことが多い。また、地形が複雑で入り組んでいるので、2万5000分の1地形図とコンパスは必携であり、場合によってはGPSがあると心強い。

(千葉支部副支部長)

REPORT

第8回登山教室指導者養成講習会を 今年も長野県小諸市で開催

支部事業委員会 中村哲也

主催…(公社)日本山岳会 支部事業委員会／後援…(公財)安藤スポーツ・食文化振興財団

2月16日(土)

会場…安藤百福記念 自然体験活動指導者養成センター カンファレンスホール

◆講義1「山岳遭難の現状から学ぶこと」石岡優士講師(長野県警察山岳遭難救助隊統括班長)

◆講義2「登山における積雪と雪崩の基礎知識」飯田肇講師(富山県立山カルデラ砂防博物館 学芸課長)

◆講義3「登山教室実施要領」重廣恒夫講師(日本山岳会 副会長)

◆講義4「実践セルフ・レスキュー」川瀬恵一講師(日本山岳会遭難対策委員会委員長)

2月17日(日)

場所…高峰高原・水ノ塔山周辺

◆実技実習「実践セルフ・レスキュー」重廣恒夫講師(日本山岳会 副会長)、川瀬恵一講師(日本山岳会 遭難対策委員会委員長)

2月16日(土)と17日(日)の両日、長野県小諸市において登山教室指導者養成講習会を開催した。本講習会は、支部の活性化と次期リーダーの育成を推進するための施策として計画され、今回で8回目の開催となる。今回も安藤スポーツ・食文化振興財団の支援を受け、岩手、埼玉、千葉、東京多摩、岐阜、静岡、東海、広島の各支部より23歳から68歳まで、女性6名、男性10名の16名が参加した。

日本山岳会の活性化・会員増強の方策として支部山行が準会員や山歴の若い会員の定着事業として注目されているが、山行の増加に伴い遭難事故の危険も増加している。また、地域の非会員を対象とした登山教室は新入会員の獲得に寄与することから、実施する支部も年々増えている。非会員を引率する場合には受講者の安全管理はより重要で、山行の安全管理に必要な知識と技術を持った指導者の育成が求められている。支部を対象に行なったアンケートでも、支部活動における問題点として指導者の不足を挙げる支部は多い。そこで支部事業委員会では、登山の安全管理に必要な知識を持つ指導者の養成を通して支部の活性化に資するとともに、各地域において登山者が安全に登山ができるよう指導できる人材の育成を目的として、今回の講習会を実施した。

1日目は安藤百福センターでの座学の講座である。重廣恒夫副会長と宮崎絃一支部事業委員長より挨拶と講習会開催の趣旨の説明を行なったのちに、4つの講義を実施した。

長野県警・石岡氏は各種資料に実際の救助現場の映像を交えて近年の山岳遭難の特徴を説明し、その原因の多くが人的要因によるものであることを示した。また、航空隊での経験から、ヘリで救助される際の留意点を説明した。飯田氏の講義は、雪の構造や性質など基礎的な内容から雪崩発生メカニズム、雪崩リスク・マネージメントにまで及ぶ内容であった。重廣氏からはスタッフ業務、講師・リーダーに求められること、事故発

生時の対応など、登山教室開催に当たって留意すべき点について具体的な説明があった。川瀬氏は2日目の実地講習に使用するロープワークの実践と弱層テスト、雪崩時の対応方法の講義を行なった。

2日目はバスに乘車して高峰高原に向かう。小諸の市街地には雪が全くなく心配されたが、車坂峠に着くと雪で覆われていた。重廣副会長と川瀬遭難対策委員長の指導の下、水ノ塔山周辺で実地講習を行なった。ミーティングと準備体操を済ませ、スノーシューやワカンなどの装備を整えて、スキー場のゲレンデに隣接した積雪の多い場所で行なった。

講習内容は①アバランチ・トランシーバーの使用方法の基礎 ②簡単にできる弱層テスト、ハンドテストの実習 ③雪崩埋没者掘り出し法のV字コンベア・ベルト法を実際にグループごとに実習 ④緊急用シエルター・スノーマウンツの作成方法実習 ⑤雪上搬送およびツエルトを使用したシート梱包を実習 ⑥悪場の通過方法の実習を、お互いにロープで結び実施。

今回の講習会には多くの支部から参加していただき、安全登山に



2日目、ツエルトを使用した雪上搬送法を実習する

ついで学習し、考える貴重な機会を持つことができた。各支部においてセルフ・レスキューや救急講習をはじめ、安全登山に対する取り組みを行なうきっかけとなり、支部山行や登山教室が適切な安全管理の下で行なわれるようになることを願っている。

指導者養成講習会に参加して

静岡支部 大島わか

今回の講習会において得たものは多く、有意義な2日間だった。初めて登山者ではなくリーダーの立場としての意識や行動を学んだ。安全登山には、賢いリーダーと出会うことが大切だ、と先輩から教

わったことがある。どのようなリーダーが理想であるのかを考えるきっかけともなった。

まず始めに、長野県警山岳遭難救助隊の石岡講師から山岳遭難・救助に関する講義をお聴きした。私が初めて知ったのは、ヘリコプター救助の話だ。高度な技術が必要なのはもちろん、重量計算が非常にシビアだ。人の体重や燃料、備品など積載物の総重量がある基準を超えるると墜落してしまう。出動時には必要最低限の荷物しか積み込めない。救助時に重量が超える場合は、旋回して燃料を消費させるそうだ。ホバリングは難しい技術で、救助隊は常に危険を伴う。

しかし不本意なことに、近年の遭難件数は増加傾向だ。その中には、安易な救助要請や勘違い通報も増えているそうだ。話の節々で、救助隊の本音が伝わってきた。山岳救助は想像以上に苛酷だ。安全意識について、私はさらに真剣に覚悟を決めて取り組む必要があると感じた。

続いて富山県立山カルデラ砂防博物館の飯田講師の講義を受けた。今まで雪に関する話は複雑で、理解するのに苦しんでいた。飯田講

師の説明は大変分かりやすく、自分の中で一歩前進できた。複雑な条件の絡む雪山に、無知で飛び込んでいくことの恐ろしさは計り知れない。学んだことを基に、さらに深く追求していきたい。講義の中で「Powder Search」というサイトを紹介していただいた。観測地点の気温や積雪などの変動をグラフで確認できる。雪の状態をある程度予測できる、画期的なサイトだという。

その後、重廣副会長と川瀬委員長にセルフ・レスキューを教わった。前提として自分がリーダーであることを念頭に置いて行動する。装備はパーティ全体の安全を考え、そろえなければいけない。私は考えが甘く、自分の分しか用意しなかった。自分本位であることを自覚させられた。救助は迅速かつ丁寧に行なうことが重要だ。実際にやってみると、なかなか思いどおりにならない。救助に夢中になり、要救助者を気に掛けることも、つい忘れてしまう。実際の現場に遭遇した場合、果たして私は動けるか心配になった。動揺して頭が空っぽになりそうだった。リーダーであれば、誰よりも冷静に取り組む

必要がある。精神面も強くなりた。できる限りの練習と準備を重ねて備えたいと思った。

今回の講習で、たくさんのお話を学んだ。私はまだ知らないことが多いと改めて感じた。そのなかで、目標としたいリーダー像も見えてきた。まずは卓越した知識や技術、経験を兼ね備えていること。その上で「仲間のことを考えて行動できるリーダー」になりたい。安全登山に最も大切なのは、その精神であると今回実感した。

思い返せば、私の周りの「良きリーダー」はそういった行動をしている。私は自分本位で行動することが多く、反省ばかりだ。今後はそういった意識も持つて取り組んでいきたい。また、日ごろから仲間全体の安全意識を高めることも、リーダーとして大切な役割だと気付いた。今の私は未熟で、教えていただくことがほとんどだが、いつかは私自身が周りに教えられるようになりたい。そのためにも今は技術や知識を身に付け、経験を重ねていく。ゆくゆくは信頼される良きリーダーになりたい。

(参考までに。大島わかな会員は23歳、最年少の女性受講者でした)

OPINION

理事の定年制はなぜ必要か

公益法人運営委員 近藤雅幸

昨年、ハイキングの老舗雑誌がその発行をやめることになりました。雑誌は書店でも販売されていましたが、そのほとんどは雑誌と一体だった山の会の会費と引き換えで購読されていました。しかし、

若い会員が入会しないため平均年齢が高くなり、いつの間にか会員が高齢者ばかりになってしまいました。そのため山に登れなくなり、やめていく会員だけが増え、結果として会員減少で収支のバランスが取れなくなつたのです。

同じ現象が、世の中の多くの山岳会や山の会で差し迫った問題となつているのは、皆さんの方がよくご存じでしょう。

この問題は日本山岳会にも当てはまります。このまま会員の高齢化が進めばどうなるか。手を拱いていれば、例として挙げた山の会と同じようなことになるのは明らかです。

高齢化によって、かつて日本の登山界をリードしてきた伝統あるクラブが衰退し、長い時を掛けて

蓄積してきた知恵と財産の多くが失われてしまうこと。おそらく誰もがそんな未来を望んではいいないはずです。

まずは若い登山者が多く入会できる環境をつくり、そこをベースにして新陳代謝を図ること。その上で会の伝統を若い人につなげていくことが今、日本山岳会に求められているのではないのでしょうか。議論になつている役員定年制はほかでもない、そういった環境づくりのために考えられ、取り決められた制度です。まずはそういった目的を理解していただいた上で定年制についての議論をする。今必要なのはそういった視点だと思います。

ご存じのように、日本山岳会の中でも東海支部やYOUTH CLUBには今も若い人が入会してきていますが、その理由の一つに、指導の中心となるスタッフの年齢が若いことが挙げられます。そのお陰で減少の一途をたどっていた50代以下の会員が、全会員数の20

%を占めるまでになりました。

会を運営するスタッフの年齢層が若いと、若い会員が入会しやすく、定着しやすいという事例は、実際に様々な所で目にします。若いスタッフは入会してきた若い会員と共通の情報ソースを利用し、同じ話題で話をすることができ、さらに若い人が登りたい山と一緒に登ることができるのがその理由でしょう。逆にスタッフが高齢だとこれらの点でどうしても若い会員との距離が生じてしまいます。

日本山岳会の運営の中心を担っているのは理事会です。それを構成する理事の年齢層は、若い会員のニーズに合った運営を考えると、決して外すことのできない重要な要素です。

会長を含めた理事が最新の登山技術や用具の使い方を知り、コミュニケーション・ツールを使いこなし、若い人と同じ山に行ける。それが可能であれば、若い会員の定着と会の存続・発展は確かなものになるのではないのでしょうか。

日本山岳会も公益法人化、定年制の導入などによって衰退化への下り坂から脱し、やっとコルでひと休みできるところまでたどり着

きました。今後は、現役で山を登っている若手を盛り立てながら、会員としての経験が豊かな皆さんのお知恵を拝借して、長く存続できる会を目指していきたいと考えます。

なお、日本スポーツ協会やJOCが70歳役員定年制を採用していることもあずかつてか、役員定年制を取り入れるスポーツ団体は、大胆な組織改革によって競技力を向上させた日本卓球連盟(75歳役員定年)や日本スケート連盟(70歳役員定年)をはじめ、最近、多く目にするようになりました。スポーツ庁も、競技団体の運営指針に役員の大選制限を盛り込むことを視野に入れていきます。このように役員の定年制と大選制限は社会からの要請でもあるのです。

蛇足ですが、評議員会は公益法人化後も従来どおり会長の諮問に応え助言する組織として認められており、評議員会の位置付けと役員定年制とは関係がないことを申し添えておきます。ただ、評議員会の運用については、高齢者の意見を取り入れる仕組みづくりなど、まだまだ改善の余地があるのも確かです。

REGULAR MEMBER

準会員から1年間で正会員へ

松尾みどり

8時22分、日本時間は14時22分。私は今、初めての海外登山でタンザニアの小さな街アルーシャにいます。以前から憧れていたキリマンジャロ登山に備え、一昨日まで高所順応を兼ねて近くのマウント・メル（4566m）に3泊4日で登っておりまして。

さて、そんな私が準会員として入会し、本格的に山を始めたのは2017年のこと。それまで大した運動経験もなく、当初は赤岳に登るのに息も絶え絶え。私より20、30歳上の先輩方に颯爽と追い越さ



マウント・メルーの山頂にて、YOUTH CLUB青年部の中谷部長と

れ愕然。リーダーにくつついて、歩き方から教わっておりまして。

準会員として過ごした1年間、様々な山や人と出会い、魅せられ、会費の元を取るどころか、会費を払ってもお釣りがくるくらいすばらしいものを得ることができたように思います。私は「一生懸けて山をやるなら」と、2018年4月、正会員に移行した次第です。

きつと年次晩餐会で私の拙い新入会員挨拶をお聞きになった方もいらつしやるかと思えます。晩餐会でお話したとおり、当初、私の父は山登りには反対しておりました。「2000m以上の高い山には登るな。危ないことはしないでくれ」と言っていた父も、今では毎週のように山に行く娘を見て、応援してくれるようになりました。正会員に移行後は沢登りやクライミング、バックカントリートと山行の幅も広がり、私の夢も膨らむばかりです。「アルパインがやりたい」と口に出し（多くのリーダーにつきまとい）、地道にボルダリングや

体力作りをすること約1年、たくさんの方々にご指導いただき今、やっとアルパインの入りに立っています。

一歩踏み出してしまえば前進するのみ。あれよあれよと進んでいるうちに、気が付けば憧れていた氷や岩の壁、白く輝く稜線が眼前に広がる今日このごろ。口に出すと夢は叶うんだなあ……。

山に行くたびに迷い、考え、成長する。自分の精神がどこまで耐えられるのか、肉体はどこまで強くなれるのか、私はどこまで行けるのか。信頼、責任、パーティとは何か。ほかではできないすばらしい経験を教えてくれる、山と仲間感謝するばかりです。

恐らく準会員の中には、入会したものの、どのように参加したらよいか戸惑っている方もいるでしょう。そんな方に私がオススメすることはただ一つ。ぜひ大きな声で「やりたい」と手を挙げてみてください。必ずその声を拾ってくださるだれかがいます。私の夢が叶ったように、皆さんの目の前にも憧れの景色が広がりますように！さて、そろそろキリマンジャロへ出発です。「蓋の付いた飲み物以外飲むな」と言っていた父。お父さん、娘はキリマンジャロの湧き水を飲んで、遅くなって帰ります。

外飲むな」と言っていた父。お父さん、娘はキリマンジャロの湧き水を飲んで、遅くなって帰ります。

【準会員から正会員への移行】

準会員の在籍期間内（注1）に正会員に移行するには、以下のような手続きをお願いします。

- ① 移行希望者は、2月末までに正会員用「入会申込書 準会員からの移行専用」（注2）に記入し、事務局に提出（2月末までに届かなかった場合は、次年度の手続きに）。
- ② 事務局から「承認内定通知」が届くので、2週間以内に入会金と年会費を払い込む（注3）。
- ③ 4月1日が入会日となり、4月以降に会員証などが届く。

ご不明な点は、本部事務局にご連絡を。✉ jimukyoku@jac.or.jp

（注1）準会員の在籍期間＝入会後3年を経過した年の3月末

（注2）「入会申込書 準会員からの移行専用」は当会HPからダウンロード。「会員専用ページ」↓「書式集」番号15要ID、パスワード

http://www.jac.or.jp/images/nyuukai-mousikomi_ikou_4-5_20180405.pdf

（注3）2週間以内に払い込みがない場合は、入会日が4月2日以降、もしくは内定取り消しになります。

ORDER

平山元会長にカンボジア王国が勲章を授与

千葉支部 津田麗子

日本山岳会元会長・平山善吉さんが昨年12月4日、カンボジア王国シエムリアップ州で開催されたアンコール遺跡保存開発国際調整委員会(略称:ICC)本会議において、フン・セン首相からサハメトレイ勲章・大騎士章を授与されました。ICCは、世界19ヶ国が参加する遺跡保存に関する国際会議ですが、今回は設立から25年を迎えた記念総会とあつて、各国から約1000名が参加しました。

このサハメトレイ勲章(Royal Order of SAHAMETREI)は1948年、ノロドム・シハヌーク国王によって創設され、「カンボジア王国友好勲章」として対外関係や外交的任務の分野で傑出した貢献を果たした外国人に与えられる荣誉です。

クメール・ルージュ時代(民主カンボジア政権下)には一時中断されましたが、1995年に国王の勅命により復活、今回までに受賞された日本人は数名を数えるのみと言われています。

今回の受賞理由は、建築構造家としての広い見識から遺跡の保存と修復工事(西参道第2、第3工区)の中心的な役割を長く担われたこと、並びにカンボジア人保存官の指導と人材養成が国際貢献として高く評価されました。

アンコール・ワットは、1162年に造営された世界最大級の石造伽藍で、1992年には世界遺産に登録された美しい遺跡です。中央の堂塔は世界の中心で、神々が住むメーラ山(須弥山)を具現しており、常に水を湛えた環濠は大海を意味し、全体を取り囲む回廊などはヒマラヤ山脈を表わすと言われます。

平山さんがリーダーとして修復に関わる西参道は、この環濠に架



サハメトレイ勲章

けられた主参道の陸橋です。幅約12m長さ約200m、地盤から敷石までは約4mと言われ、石を小口面が見えるよう平らに積み上げ、その石組みの中に砂を詰め込む工法で造られています。長い間に石の隙間から流入する環濠の水によって、何度か崩壊の危機にも見舞われていました。

現在、アンコール地域遺跡保存整備機構(略称:アプサラ機構)に協力し、修復作業を行なっている国は、日本をはじめとして6ヶ国と言われており、この西参道の南半分は1960年にフランス隊が修復。残る北側半分については「上智大学アンコール遺跡国際調査



サコナ文化大臣(左)から勲章を授与された平山元会長

団」を中心とする取り組み作業が1995年から続けられています。日本は修復理念を「崩壊の危機に瀕した遺跡の形を元に戻すだけというのではなく、往時の石積み壁面を保存しながら、紅土石などの石材によるカンボジアの伝統的な擦り合わせ工法、技術尊重を第一とする……」としており、その姿勢ときめ細かい指導は大きな成果を挙げています。

国際協力が行なわれている西参道の修復現場は仮棧橋から見られますが、言葉の壁を越えた信頼関係は、遺跡修復に関わる人材養成のモデル活動としても注目されています。



勲章とともに授与された賞状

NEWS

「2018植村直己冒険賞」は、スリランカ
遺跡調査探検をした岡村隆さんに

「過去の受賞者の中でも、今回は最も冒険らしい冒険、探検らしい探検だった。ご自分の人生を懸けてじつくりと取り組み、やりたいことをやってきた。植村直己冒険賞にぴったりの受賞者だと思う」

（選考委員の作家・西木正明氏）

「約50年に及ぶ挑戦にこの賞を贈りたい。岡村さんの活動は冒険賞の趣旨に沿っており、本来の冒険賞に相応しい人が受賞されたことを喜んでい」（同じく選考委員の中貝宗治・豊岡市長）。



2月12日、記者会見に臨んだ岡村隆さん(左)

第23回となる「2018植村直己冒険賞」の本年度の受賞者は、約50年の長きにわたってスリランカの密林に残されている遺跡の調査探検に情熱を傾けてきた岡村隆さん(70歳)に贈られる。

岡村さんは1967年、法政大学入学とともに探検部に入部。69年から2003年まで、7次にわたる同大スリランカ密林遺跡調査隊に参加し、ジャングルの中に眠っている未知の仏教遺跡を探し求めてきた。さらに2000～08年の間はスリランカ密林遺跡研究会として活動、08年2月、NPO法人・南アジア遺跡探検調査会を設立、その後の10年間に6回の探査を続けている。

スリランカ国内のジャングルには、たくさん遺跡が存在するものの、政府や大学には調査費用や人員が乏しく、これまで放置されてきた結果、盗掘や破壊が進んでいるという。岡村さんは、これら貴重な文化財が失われていく現状を目の当たりにし、「だれかが

なんとかしなければ」「学術調査の前段階である遺跡を発見し探査するという行為は、専門家ではなくアマチュアが行なうべきである」と考え、行動に移してきた。

昨夏のスリランカ政府考古局との合同探査では、ヤラ国立公園内のタラグルヘラ山(240m)に到達、山頂の仏塔跡や付近の岩窟寺院跡、密林中の建造物(伽藍)跡などを発見している。また、マルワリーヤと呼ばれる孤立岩丘の岩陰では、先住民の岩絵を発見するなど多くの成果を挙げている。タラグルヘラ山遺跡は、100年以上前に英領セイロンのイギリス人測量隊が所在を確認して地図に記載しているが、その後は探検も調査も行なわれず、ジャングルに埋もれていたものである。

最初の探検から45年間もスリランカの密林で、ゾウやヒョウ、クマなどにおびえながら遺跡調査を行なってきたが、続けられている一番の理由は、「この現代において古典的な探検ができること、未知のものを未知の土地で探す喜びがあるからだ」と岡村さんは言う。さらに「スリランカで今までに258ヶ所の遺跡を調査してきた

が、我々の活動は地味な探検で、取るに足らない小さな遺跡だ。しかし、どんなに小さな、見栄えのない遺跡でも、その一つ一つの調査の積み重ねと、地道な作業の継続にこそ、自分にも結果の分らない『意味』があり、未知の対象に迫るといふ一点にこそ、何物にも勝る『面白さ』がある」と。

今回の受賞に関して岡村さんは、「授賞の連絡があったとき、戸惑いながらも感激した。私の場合、どちらかというところ探検寄りだが、それでいいのだろうか。また、最初は一人で形作ったが後はチームでやってきたので、一人でいただいていいのだろうか、と考えた。しかしながら、我々の地味な活動にまで目を向けてくださった選考委員の先生方に感謝している。これは私一人ではなく、仲間全員へのご褒美だと思っている。過去にモルディブで植村さんにはお世話になつていたので、この賞を私の人生に刻み付けていきたい」。

最後に、「これまであまり知られていなかったが、日本仏教の太い源流がスリランカにあるのではないか。それを探っていきたい」と今後の抱負を語った。(節田重節)

さんけん通信

なんと受水槽の底から水漏れ！

山研運営委員会担当理事 安井康夫

昨年の山研開所作業のときだった。受水槽にある程度水道水を給水していたそのとき、いつも水回りで応援してくれている高橋聡会員が、「大変だ、底から水が漏れているぞ！」と叫んだ。「えっ？」と言って覗いてみると、なるほど漏れているではないか！ すぐさま排水。幸い高橋会員がエポキシ樹脂を持参していたので、傷口に練り込んでもかく応急処置をした。「交換しないといけないな」との言葉に大きいため息をつく。



解体中の従来の受水槽

そして、すぐさま本部に報告を入れる。その後、水漏れのいやな夢を幾度か見た。管理人から電話が入るたびに、「まさか……」と。幸いすべて別件だったので、ほっとする。この受水槽は、今の山研が建てられたときのもので、25年を経過しており、相当劣化していた。今後、このような形で様々な補修を重ねていくことになる。山研の改修事は内容によって異なるが、環境省、林野庁、文化庁などへの申請が必要となる。今回



新しくなった受水槽

回は受水槽の大きさやベース位置が変わらないので、掘削工事が発生しないことから林野庁だけの申請で済んだ。が、工事着手の2ヶ月前までに申請を終えておかねばならない。この年は、山研の外壁と屋根の塗装工事が控えていた。申請先の森林管理署は、塗装と受水槽の工事申請を一緒にしてほしいと言う。山研を利用する会員の皆さんに迷惑は掛けられない。受水槽の取り替えをいつにするのか、悩んだ。結局、塗装工事を9月に行ない、受水槽の取り替えは山研閉所直後に行なうべく手続きに入った。

山研はほかの施設よりも高い所に立っているため、時間帯によっては水道水が上がつてこない。一定の貯水量を保つため、受水槽の架台や本体の高さを慎重に検討した。本体を高くするとマンホールが建物に当たると、架台を低くすると水抜管のメンテナンスができない。

9月下旬、塗装工事が終わった（工事費約300万円）。そして、山研閉所翌日の10月29日から受水槽の工事が始まった。高橋会員と私は山研に4日間連泊して、玄関先

の階段の補修工事をしながら受水槽の工事施工を見守った。設置が終わると受水槽に水を貯めて建物内に水を送り込む。問題はない。半年間どつとのし掛かっていた疲れが、やっと取れて安堵した瞬間だ。「これで春には皆さんに案内できる」と、うれしさがこみ上げてきた（工事費約150万円）。

今年は4月23日から利用できるように、山研の開所作業は4月20日・21日に行ないます。新しい受水槽で管理人とともに山研委員一同、皆様のご利用をお待ちしております。



吉村健児 (よしむら・けんじ)
会員番号3173

終身会員・永年会員で、九州を代表する偉大なる登山家、吉村健児氏が1月22日17時1分、老衰により自宅で亡くなりました。享年94でした。平成17(2005)年8月に脳出血で倒れ、半身に軽い麻痺が残ったそうです。葬儀は神式で、「吉村健児翁命霊」の霊璽に会葬者一同、玉串をお供えしました。

吉村健児さんを悼む

日向祥剛

追

OBITUARY

悼



生るとき英彦山に登ったのが最初の登山で、その後、八幡製鐵所に就職、山岳部に入部し本格的に山に登り始めました。

明治高等専門学校(現在の九州工業大学)の夜学に通いながら、昭和17(1942)年に伯耆大山で初めてご来光を拝み、昭和23(1948)年5月には単独で北アルプス・燕岳から大天井岳を往復しています。当時、八幡製鐵所山岳部では、まだだれも北アルプスには入山した実績がなかったそうです。

同年11月に藤崎定雄氏(1676)、橋本三八氏(1713)の紹介で日本山岳会に入会されています。それから23年間、正月の連休はすべて北アルプスか、伯耆大山の雪山で過ごされています。

海外の山は昭和47(1972)年9月、ヨーロッパ・アルプスのモン・ブランへ行き、11月には、当

時の三田幸夫会長の一行に参加し、ヒマラヤのエベレスト・ビュール・ホテルに行かれたそうです。その後、海外の山行としてはアコンカグアをはじめキリマンジャロ、カナダ、ニュージーランドなど各地に35回以上行かれています。アイガーのミッテルレギ小屋の建て替え募金にも協力し、多額の寄付をされています。

還暦を迎えたとき、何か目標を立てて登山をしようと日本百名山に登り始め、平成8(1996)年10月19日、磐梯山で完登されました。

吉村さんの山に対する信条は、①山の自然環境を大切にすること、②事故を起こさないよう自分の体を大切にすること、③山の仲間を大切にして多くの山友たちをつくること、でした。

吉村さんの応接間兼事務所には、足立源一郎画伯の山の絵が飾られています。ほかに山の書斎や談話室があり、数人で酒を飲みながら山の話を一晩中して、あぐくの果て一升ビンを枕に宿泊した思い出もあります。

大地主であったことから昭和40(1965)年に八幡製鐵所を退職

し、翌年に吉村興産を設立されました。日本赤十字社や宗像大社などにも多額の寄付をされ、紺綬褒章も受章されています。

スキー選手として国体にも出場し、スキー連盟の副会長も務め、山岳会のアルパインスキークラブにも平成4(1992)年より加入、本部評議員、山研委員、福岡支部長、初代北九州支部長も務めていただきました。

「時間と金を使った、登山中心の生活」を送ったそうで、2〜3ヶ月の山行も珍しくなく、ヒマラヤやシルクロードの旅に出かけられました。東京にもよく行かれ、日本山岳会の友人も多く、山岳会を大切にした人でした。山岳会からは創立百周年記念式典・祝賀晩餐会で、長年にわたる日本山岳会への支援について、特別功労表彰として感謝状を送られています。

今、高齢だったとはいえ吉村さんを失うことは、北九州支部だけでなく日本山岳会、山の世界としても残念でなりません。吉村さんの志を心に刻み、引き継いでいこうと思います。

改めて、御霊のご平安をお祈りいたします。

東 西 南 北

N

S

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。（紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします）

榎有恒―宮城・泉ヶ岳から世界の山へ

小原茂延

「日本の横巻氏は前人未踏のアイガー東山稜を遂に征服す」という大見出しで各紙が第一面を飾り、評判になったことがある。五十余年前（筆者注・1973年から数えて）のことで、「横巻氏は有恒、横先生であることが間もなく判りました……。」と佐藤久一朗がエピソードを残している。

榎有恒著の岩波新書『私の山旅』によれば、榎は明治27（1894）年2月5日、仙台市に生まれたとある。父・武は慶應義塾を出て当時、仙台で奥羽日日新聞の主筆をしていたそうであるが、元々は越後長岡藩の武士の出であり、さらにたどれば河合継之助のように三河武士が発祥という。父の転職で一家は神戸に移住、初めて登った

山は摩耶山で、母、叔母、妹と一緒にだったという。

小学校4年のとき、父は東京に転勤、転校を繰り返すのは良くないとの両親の考えから、兄・智雄とともに（兄はその後脚気を罹患して親元へ）仙台の叔父の家に預けられる。その家は北七番町あたりにあって、国見峠など近傍の野山を駆回って少年時代を過ごした。そして仙台二中（現・仙台二高）から慶應義塾へと進む。

泉ヶ岳は現在、仙台市民の山として親しまれ、「日本三百名山」にも選ばれている秀峰である。1200mに満たない標高ながら、麓のミズバショウ、頂上付近のブナ林が美しい。今は市内から日帰りできるが、榎が初めて登った当時は麓の根白石村などに泊まり、わらじ履きで教えられた谷間や林の中をたどり、残雪の残る山頂を踏んだという。目的を達して探検

気分を味わった、と懐かしんでいる。これが後年のアイガー東山稜初登攀、カナディアン・ロッキーのアルバータ峰初登頂、そしてヒマラヤ8000m峰、マナスル初登頂の道につながったのである。

後年、思い出の山である泉ヶ岳に登ったことを書いている（毎日新聞社刊『山の心』）。岳連の伊達篤郎君（政宗の子孫で当会宮城支部長を務めた）らに手配をお願いし、登山口にできた泉ヒュッテに泊まったが、スキー施設もできたのにびっくりし、故郷の山の往時を想い、感慨しきりであった様子が行間に滲んでいる。

日本の近代登山史において小島烏水と榎有恒は別格の貢献を成したといえるが、最近の登山者がどれだけ烏水翁を承知しているか、甚だ心もとないところであり、まして著作を読む人はまれであろう。榎有恒については、比較的近い過去にマナスル初登頂を成功に導いた隊長として知られ、アイガー東山稜登攀の記録を主とした『山行』などは、日本人による近代アルピニズムのバイブルといえよう。

榎が登山の上で薫陶を受けた鹿子木貞信・慶應義塾大教授はドイ

ツ留学のおりにアルプスを訪ね『アルペン行』を著しているが、学生時代から内村鑑三に師事した敬虔なクリスチャンだった。山岳部の学生は皆、心服していたというロンドンにウエストン師を訪ね、グリンデルワルトの滞在を勧められ、アイガーのメンバーを組むときには経験者のアマターを加えたこと、カナディアン・ロッキーの難峰アルバータに全員初登頂の際には万歳も唱えず黙して、ただ固い握手を交わし喜びを称え合ったこと、マナスル山麓のサマにおけるラマ僧との交渉等々、随所に人品高潔な榎有恒の人格が表われていたのだろう。榎家のグロバルな思想は今も引き継がれている。

活き活きと描き出された古墳学者ガウランド

原邦三

昨年10〜12月に明治大学博物館（東京・千代田区）で「日本の考古学の父」ガウランドの特別展が開催された。展示物は、古墳研究調査時にガウランド本人が撮影した遺物と古墳内外の写真、収集した絵画（多くは大英博物館蔵）などだ。

寄附金及び助成金などの受入報告 (平成31年1月31日まで)

寄附者など	受入金額など (単位千円)	寄附の目的、その他
松本 敏夫 会員	10	山のマナーノート
平井 一正 会員	20	山岳会の発展・若手育成
芳賀 孝郎 会員	20	山岳会の発展・若手育成
岩坪 五郎 会員	20	山岳会の発展・若手育成
高村 奉樹 会員	20	山岳会の発展・若手育成
中島 道郎 会員	20	山岳会の発展・若手育成
日本山岳会 北九州支部	20	山のマナーノート
中山 茂樹 理事	12	公益活動一般
小西 晃 会員	100	日本山岳会運営費
株式会社メイクス	15	寄附目的不明
佐野 忠則 会員	400	日本山岳会運営費
赤松 千枝子 様	100	日本山岳会運営費
松野 賢珠 会員	15	永年会員として (日本山岳会運営費)
八木 功 会員	30	静岡支部創立70周年記念事業 (記念式典開催及び記念誌発刊)
大島 康弘 会員	10	静岡支部創立70周年記念事業 (記念式典開催及び記念誌発刊)
有元 利通 会員	30	静岡支部創立70周年記念事業 (記念式典開催及び記念誌発刊)
畠中 智代 会員	10	静岡支部創立70周年記念事業 (記念式典開催及び記念誌発刊)
長野 和義 会員	10	静岡支部創立70周年記念事業 (記念式典開催及び記念誌発刊)
小西 晃 会員	30	静岡支部創立70周年記念事業 (記念式典開催及び記念誌発刊)
中野 雅章 会員	10	静岡支部創立70周年記念事業 (記念式典開催及び記念誌発刊)
熊岡 達雄 会員	30	静岡支部創立70周年記念事業 (記念式典開催及び記念誌発刊)
匿名 1名	30	静岡支部創立70周年記念事業 (記念式典開催及び記念誌発刊)
少額寄附者10名	—	静岡支部創立70周年記念事業 (記念式典開催及び記念誌発刊)
少額寄附者12名	—	山のマナーノート

当会報でも、837(2015年2月)号に「古墳研究のさきがけ・ガウランドを考える」と題した同博物館および日英共同研究調査グループ主催のシンポジウム開催記事を載せ、ガウランドの古墳研究者としての事跡を紹介した。今回は開催された特別展示に合わせて発行された図録、「ウィリアム・ガウランドと日本の古墳研究」に沿ってガウランドを紹介する。

ガウランドは30歳のときに冶金技師として日本に招かれ、明治初期に新政府発行の貨幣鑄造で大活躍した「お雇い外国人」であったと同時に、登山家・日本絵画収集家・漕艇競技者、そして考古学者と、多様な顔を見せた。登山家としてはアーネスト・サトウらとともに中部山岳地帯などを巡り、「日本アルプスの命名者」としてその名が知られる。日本絵画は円山四条派の円山応挙、森狙仙など江戸後期から明治初年にかけての写実的な作品を数多く収集している。しかし、年齢とともにそれらへの興味の度合いは変化する。1881(明治14)年ころから登山の熱は急速に下がり、後年、最も評価される古墳調査に熱中するようになった。以後、1888(明治21)年に46歳で帰英するまで、実地検証した古

墳は406基に及んだ。図録はその主な研究対象の古墳をピックアップし、それに向き合うガウランドの様子と、調査時の記録、写真を詳細に伝える。そして、なぜ突然、古墳研究に傾斜したか——について、影響を与えた重要な人物二人を挙げている。一人は前出のアーネスト・サトウ。サトウは幕末・維新時に外交官として活躍すると同時に日本研究の基礎を築くなど、文化面でも足跡を残した。古墳についての見識も高く、上野国古墳の発掘調査を行なっている。そして、その調査情報をガウランドに伝えた。

もう一人は日本研究の第一人者とされた、外交官のウィリアム・ジョージ・アストンだ。日本アジア協会が古墳についての発表を行ない、ガウランドとともに大阪高安千塚古墳、大阪玉手山古墳を調査した。ガウランドにとって、サトウの上野国古墳が古墳研究の入り口となり、古墳の本格的調査のきっかけとなったのがアストンの存在であった。その影響は大きかったと言える。

ガウランドは本職の大阪造幣局内での評価が高く、16年の長きにわたって在職した「お雇い外国人」はほかに例を見ない。帰英後、冶金学の専門家として活躍することにも、ストーンヘンジの発掘や滞日中の古墳研究の発表など、考古学の面白さを人々に伝達していく。謹厳実直で真面目と評され、登山の世界では少々謎めいている人物であるが、図録は生き生き、はつらつとした科学者・ガウランドの姿を伝えている。

*図録「ウィリアム・ガウランドと日本の古墳研究」(A4判 フルカラー 80ページ)は1300円(税込み)で購入できます。詳細は明治大学博物館HPで。

Climbing&Medicine・83

登山に最も必要なのは技術ではなく体力 —百名山を達成するイロハのイ—

大野秀樹

「だれも選手交代はない」。これは、登山の本質の1つです。病気、外傷などで行動不能にならない限り、どんなに疲れても苦しくとも、自分の足で歩かなければならない。登山では、最も弱い人のペースに合わせて歩く必要がある。1人でも弱い人がいれば、ペースは激減する。天候の急変など、歩行速度を上げたいときにもそれができず、全員が危機的状況に陥りかねない。山本正嘉・鹿屋体育大学教授は、中高年者の集団登山は極力避けた方が良く、と唱えている(『登山の運動生理学とトレーニング学』、東京新聞、2016)。さもないければ、数名に1人はサブリーダーを付け、それぞれ別パーティとして行動できるように配慮すべき、と。つまり、集団登山では、最も弱い人でも登ることができる山を選択することが重要だ。

一方、それではいつまでも易しい山にしか行くことができない。その解決には、個々の登高能力を知り、適切なトレーニングによって登山体力を改善することが必要だ。それには、六甲タイムトライアルがよく知られている。すなわち、山麓の阪急電鉄・芦屋川駅からロックガーデン、雨ヶ峠を経て六甲山最高峰(931m)まで、累積の標高差が984m、標準タイムが3時間35分のコースを、自分の体力に無理のない範囲でなるべく速く登る。そのタイムから、自分がどのレベルの山に行ける基礎体力があるかを評価する(図1)。たとえば、4時間6分以上掛かる人は、5メッツ以下の体力で、低山ハイキングでも困難かもしれない(メッツは、身体活動の強さを、安静時〈1メッツ〉の何倍に相当するかで表わす単位)。これは、高尾山(たとえば、稲荷山コースの標準タイムは高尾山口駅から1時間40分)など多くの山に応用できそうだ。

次に、登山体力増進だ。トレーニングとしてまず浮かぶのはウォーキングだろうが、山本氏は、平地でのウォーキングは登山のトレーニングとして充分ではない、と断定している。そこで坂道を利用したり、荷物を背負ったり、負荷を掛けると、より効果的になる(図2)。最も有効なのは、どんな低山であっても実際の登山であり、月に2

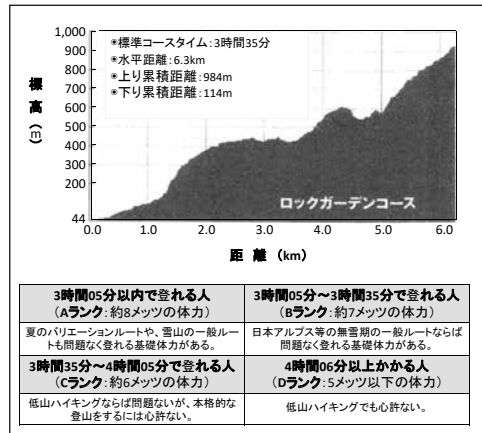


図1. 六甲タイムトライアルのコースと体力評価基準

低山での登高能力から、どの程度の登山ができる基礎体力があるかを予測できる。このようなコースがあれば、自分で体力テストやトレーニングができる。5メッツ: 野球など、6メッツ: バスケボールなど、7メッツ: サッカーなど、8メッツ: ランニングなど。

(山本正嘉: 『登山の運動生理学とトレーニング学』、東京新聞、2016より引用改変)

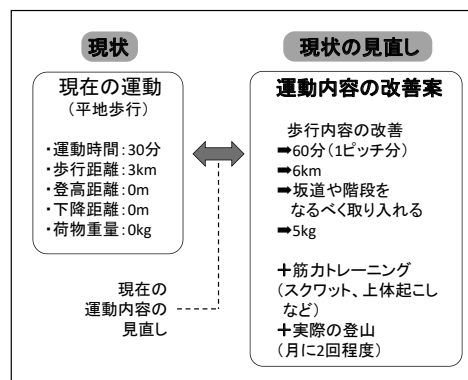


図2. 体力トレーニングの考え方の例

まず、目的とする山でどのような体力が必要になるのかを明確にする。次に、現在のトレーニング状況と照らし合わせて、足りない部分を確認する。そして、そのギャップを埋めるために、現在の運動をどのように改善すればよいかを考える。

(山本正嘉: 『登山の運動生理学とトレーニング学』、東京新聞、2016より引用改変)

回は実施したいものだ。そのほか、筋力トレーニングなど、目標の山のレベルが高くなれば、よりハードなトレーニングが要求されるのは、ほかのスポーツと変わりがない。

こうした地道な努力を継続すると、無雪期の百名山を達成することは夢ではなくなるだろう。

(「大和会便り」No.55を一部改変して掲載)

なお、過去のコラムは次の手順でご覧になれます。ご活用ください。

日本山岳会ホームページ→日本山岳会の活動案内→委員会→医療委員会 <http://jac.or.jp/info/iinkai/iinkai.html>

山行委員会

妙高高原・太平山
スノーシュー・ハイク

3月3日(日)、赤倉ユアーズインのオーナー・小笠原達夫氏の先導で妙高高原・太平山へスノーシュー・ハイクを楽しんだ。



妙高山をバックに山頂で

活動
報告

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です。

小笠原達夫(66)、菊池武昭(77)、高橋 努(74)、征矢三樹(68)、佐藤レイ子(68)、廣島孝子(76)、東 洋子(67)、中坪皓(74)の8名が参加した。

3月2日(土)、午後4時に妙高高原・新赤倉温泉「赤倉ユアーズイン」に集合した。ひと風呂浴びて6時から夕食、メニューを紹介しておこう。

白身魚のエスカベージュ、海老に卵白包み揚げオーロラソース、チキンサラダ、コーンクリームスープ、和牛サーロインステーキ舞茸添え、カマンベールチーズケーキ、コーヒール、そして赤ワイン。菊池リーダー「洒落てるね」「日本酒もちよつと飲みたいんだけど、頼んでいいだろうか?」「いいと思いますよ」「日本酒お願いします!」。

飲んで、食べて、話して楽しい夕食が進んだ。

3月3日(日)曇り。風もなく、まずまずの天気。8時30分にユアーズインを出発した。兼俣までは車で移動し、ここでスノーシューを着ける。雪も適度に締まり、スノーシューが快適に滑る。今は廃屋になっているリフトの終点まで登り、そこから曲り沢の左の尾根に登る。太平山までならかな登りが続く、ミズナラ林の快適なスノーシュー・ハイクだ。太平山はおよそ900m、最後の斜面をひと登りすると太平山(858m)の頂に立った。ユアーズインを出て2時間、なだらかな山頂には標識はない。西に妙高山(2300m)がでんとそびえる。山頂の積雪はおよそ2・6m、例年よりは少ないらしい。ここで大休止。昼食をとりながら山頂気分を満喫した。

11時20分、山頂を後にする。小笠原さんはスキーを着けて登ってきた。「皆さんは好きな所を下ってください!」と言って、さっそうと滑り下っていった。

登り2時間、下り1時間半、13時にはユアーズインに戻った。そして、ひと風呂浴びて「太平山スノーシュー・ハイク」を解散した。

(中坪 皓)

支部

だより

全国各地の支部から、
それぞれの活動状況を、
北から南へとレポート
します。

千葉支部

房総・内浦山で

4支部合同懇談会

今年で12回目となる北関東ブロック4支部(群馬・栃木・茨城・千葉)合同懇談会が、2月16、17日に千葉県・鴨川市の「内浦山県民の森」で開かれた。今回は千葉支部が担当で、4支部からは47名が参加



4支部全員での記念撮影

した。

初日は、千葉支部の三木雄三支部長の歓迎挨拶に続き、各支部の今年度活動報告を行なった。千葉支部は、郡界尾根の踏査完了などを説明した。各支部からは山の講演会や健康登山塾など、それぞれが活発に取り組んでいる活動の報告があった。栃木支部からは、今秋予定している南米エクアドルへの交流登山計画が発表された。

続いて行なわれた講演会では、千葉支部の松田宏也会員によるミニヤコンカ奇跡の生還の一部始終が、「生きて還って、また登る」と題して行なわれた。1982年の中国・ミニヤコンカ峰での遭難と19日間にわたる想像を絶する生還劇、帰国後のリハビリ・社会復帰、現在もハンデキャップを苦にせず登山を楽しむ姿に参加者から大きな拍手が送られた。続いて、千葉支部会友で東大千葉演習林職員の

吉田明子さんは、「南房総の自然と見どころ」と題した講演で、鴨川周辺の動植物の生態をスライドを使って分かりやすく説明し、翌日の山行に役立てた。

夕刻からの懇親会では、房総近海で獲れた新鮮な魚介に舌鼓を打ち、各支部が持ち寄った日本酒が次々と開けられ、毎回参加する人も初めての人も打ち解けて和やかに談笑した。

翌17日は、宿泊した県民の森のテラスで記念撮影した後、内浦山から麻綿原^{まめんはら}を経由して清澄寺へ行く登山コースに27名、日蓮上人ゆかりの誕生寺見学や菜の花畑での花摘みなどの観光コースに18名と、2手に分かれて行動した。登山コースの清澄山は標高350mと低山だが、周辺は房総でも山深く、山頂近くの清澄寺にある天然記念物の千年杉が有名。今回は東大演習林内の一杯水林道をのんびり歩いた。

あいにくの曇り空で肌寒く、清澄山ではわずかだが雪もちらつくほど。温暖な南房総の早春を楽しんでもうえなかったのが少し残念であった。両コースは正午過ぎに清澄寺で無事合流し、境内でお弁

図書委員会

第36回 図書交換会報告

恒例の図書交換会は今回も年次晩餐会会場の一角で開催された。今年の出品は約400点。いろいろな事情から売り上げの8割を返金する方式をやめ、出品を無償としたためか、これまでと比べて出品図書が大幅に減る結果となった。一時は開催自体が危惧されるような状況だったが、それを知った図書委員や関係者が善意で書籍を出品してくれ、なんとか例年並みの書籍を会場に並べることができた。

それでも、当日の図書交換会会場は、例年にも増して盛況で、目を引くような出物がなかったにもかかわらず、並んだ本はほぼすべて完売となった。ありがたいことである。山の本が売れなくなつてから久しいと聞くが、日本山岳会にはまだまだ本の好きな人が多いのだ、と再認識させられた1日だった。

なお、今回の図書交換会の収支は次のとおりである。

売り上げ 6万2715円
経費(運送料等) 2万9715円
差引Ⅱ晩餐会会計への繰入 3万3000円

(近藤雅幸)

当を広げた後、周辺を散策。迎えるバスと車で県民の森へ戻った。最後に支部長挨拶があり、来年の茨城支部での再会を約束して解散した。

この支部合同懇談会も回数を重

ねて、4支部の結び付きが年々強くなってきたことを感じる。今後はさらに一歩進めて、4支部による合同イベントなど開催できれば、と思った。

(三田 博)



平成30年度第9回(2月度)理事会 議事録

日時 平成31年2月13日(水)19時00分～20時16分

場所 集会室

【出席者】 小林会長、重廣・野澤・

中山各副会長、神長・永田・

古川・谷内各常務理事、安

井・清登・星・近藤・波多

野各理事、平井・石川各監

事

【欠席者】 齋藤理事(所用のため中

山副会長、波多野理事は審

議事項1まで、平井監事は

審議事項2まで欠席)

【オブザーバー】 節田会報編集人

【審議事項】

1・「準会員制度検証プロジェクト」設置について

準会員制度施行後の状況について検証するため「準会員制度検証プロジェクト」を設置することとした。(賛成11名、反対なしで承認)

2・平成30年度(後期)海外登山助成対象登山隊審査について

海外登山助成金審査委員会の報告を受けて審議し、以下の登山隊1隊に対し平成30年度(後期)海外登山助成金として20万円を助成することとした。(賛成13名、反対なしで承認)

図書受入報告(2019年1月)

著者	書名	頁/サイズ	発行者	発行年	寄贈/購入別
D.アイカー、安原和見(訳)	死に山：世界一不気味な遭難事故《ディアトロフ峠事件》の真相	352p/20cm	河出書房新社	2018	購入
小泉武栄(監修)	山のポケット自然図鑑(「山と溪谷」2019年3月号別冊付録)	144p/18cm	山と溪谷社	2019	出版社寄贈
大石明弘	太陽のかけら：ピオレドール・クライマー谷口けいの青春の輝き	311p/20cm	山と溪谷社	2019	出版社寄贈
忽那敬三	ウィリアム・ガウランドと日本の古墳研究	80p/30cm	明治大学博物館	2019	発行者寄贈
田辺寿	二人者 Part II	48p/22cm	文芸社	2019	著者寄贈
大蔵喜福(編)	ナンダ・コート初登頂80周年記念事業報告書	43p/30cm	ナンダ・コート初登頂80周年記念事業実行委員会	2018	発行者寄贈

助成対象登山隊名「JAPAN Trench Mir & Noshag Exp. 2019」

【協議事項】

- 1・次期役員人事について(小林)
次期役員人事について協議した。
- 2・平成31年度上高地山岳研究所
管理人雇用契約およびアルバイト
雇用契約について(安井)
平成31年度上高地山岳研究所管
理人雇用契約およびアルバイト雇
用契約について協議した。
- 3・上高地山岳研究所の塗装工事
の会計処理について(古川)
上高地山岳研究所の塗装工事の
会計処理方法について協議した。

【報告事項】

- 1・入会希望者19名、準会員入会
希望者6名について入会承認を行
なったとの報告があった。(小林)
- 2・寄附金16件の受領について報
告があった。(古川)
- 3・記念事業委員会の活動状況に
ついて報告があった。(重廣)
- 4・支部事業委員会の活動状況に
ついて報告があった。(重廣)
- 5・家族登山普及委員会の活動状
況について報告があった。(波多
野)

- 6・デジタルメディア委員会委員
長交代について報告があった。
(永田)
デジタルメディア委員会・新委
員長 大塚幸美(No.13707)

- 7・平成30年度年次晩餐会の収支
について報告があった。(永田)
- 8・CASIOスマートアウトド
アウォッチWSD-F20の斡旋販
売結果について報告があった。
(永田)

- 9・「山」2月号の発行について報
告があった。(神長)

- 10・「第4回全国「山の日」フォー
ラム」(3月16～17日、東京都千
代田区)への当会の出展について
報告があった。(清登)

- 11・登山計画書の提出状況につい
て報告があった。(中山)

【連絡事項】

- 1・総会関連業務と日程について
(谷内)

【今後の予定】

- 1・常務理事会・理事会
・平成30年度3月度常務理事会
3月5日(火) 18時30分～
・平成30年度3月度理事会 3月
13日(水) 19時00分～

2・事業計画・予算等

- ・平成31年2月28日 平成30年度
支部および委員会事業報告(提出
期限)
- ・平成31年3月31日 平成30年度
支部会計報告(提出期限)

ルーム日誌 2月

- 4日 総務委員会
- 5日 記念事業委員会 スケッチ
クラブ
- 6日 常務理事会 山行委員会
バックカントリースクラブ
- 7日 YOUTH CLUB ス
キークラブ
- 8日 図書委員会 「山の日」事業
委員会
- 12日 山岳研究所運営委員会 フ
ォトクラブ スケッチクラブ
- 13日 理事会 休山会 山想倶楽
部
- 14日 支部事業委員会 山岳地理
クラブ 九五会
- 15日 YOUTH CLUB ス
ケッチクラブ
- 16日 山の自然学研究会
- 18日 総務委員会 資料映像委員
会
- 19日 スキークラブ 里山歴史研

20日	研究会	YOU TH CLUB	フ
20日	オトクラブ	三水会	つ
21日	くも会		
21日	会報編集委員会	科学委員	
21日	会	みちのり山の会	マウ
22日	ンテンカルチャークラブ		
22日	総務委員会		
25日	自然保護委員会	緑爽会	
26日	デジタルメディア委員会		
26日	遭難対策委員会	平日ク	
27日	クラブ		
27日	家族登山普及委員会	公益	
27日	法人運営委員会	00会	
27日	麗山会		
28日	山岳研究所運営委員会	学	
28日	生部 01会	山遊会	
28日	2月来至者	439名	
西村政晃	7468	19・2・28	
小林岳彦	9429	18・12・24	
三好まき子	9945	19・1・28	
中村武雄	10547	18・12・20	
林田健治	11711	19・2・2	
退会			
三上博民	8204		
山田 勲	8256	越後	



◆中村好至恵—山の絵展
@Yokohama
四季を通じて訪ねた、北海道・東北・関東の山々の水彩画展。画材を山に運び、現場で制作した100点余りを展示する。山岳書に



インフォメーション



後藤三男	10325	千葉
板橋 明	11373	富山
中野守久	13474	
三好 勇	13595	広島
牧田正弘	13784	福井
尾形榮一	14219	
藤倉節子	14389	

大塚武雄	14421	埼玉
畠山優美	15154	
仁保真紀子	15230	
上田達夫	15486	東京多摩
相良幸子	15994	茨城
松本敦子	16001	東京多摩
奥村明徳	16271	東海



http://yamanoe-jindo.com

21 山の絵 HP

掲載された挿絵の原画も数多く含まれる。
会場 「みつい画廊」横浜市中区吉田町5-1
日時 4月8日(月)～21日(日)11～18時
11日(木)と17日(水)は作者不在 最終日は16時まで
問合せ TEL 045-261-133

◆編集後記◆

●NHK・TVの朝ドラ「まんぷく」が大好評のようですが、このドラマはチキンラーメンなどの生みの親で、日清食品の創業者・安藤百福さんの奥様、仁子さんが主人公の物語です。百福さんは1983年、「食とスポーツは健康を支える両輪である」との信念の下、私財を提供して財団を設立しています。●この財団は子どもや若者たちを対象に自然体験活動への支援や各種スポーツ大会の後援、食文化振興などの活動を行なっています。今月の会報4ページにも報告があるように、JACCに対しても指導者養成への支援として、第1回から講習会場並びに助成金を提供していたいただいております。山でラーメンを啜るとき、ちよつと思ひ出してあげてください。(節田重節)

日本山岳会会報 山 886号

2019年(平成31年)3月20日発行
発行所 公益社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会長 小林政志
編集人 節田重節
Eメール: jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社